

牛肉

◆ 飼養動向

肉用牛の飼養頭数、前年比 1.1% 増

肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いていることから、令和2年（2月1日現在、以下同じ。）は、4万3900戸（前年比3.7%減）^{（注1）}と前年をやや下回った（図1）。

総飼養頭数は、2年は、255万5000頭（同1.1%増）と前年をわずかに上回った。肉用種と乳用種をそれぞれ見ると、肉用種は、平成28年以降、子取り用雌牛（繁殖雌牛）頭数が増加基調で推移していることから、2年は、179万2000頭（同2.3%増）と前年をわずかに上回った。乳用種^{（注2）}のうち交雑種は、肉用子牛価格の高騰を受け、酪農家における乳用牛への黒毛和種交配率が上昇したことにより、28年、29年と2年連続で増加したものの、30年以降、乳用牛の減少に加え、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や、乳用後継牛を確保する動きから、減少傾向で推移しており、2年は、49万5400頭（同0.7%減）と前年をわずかに下回った。乳用種のうちホルスタイン種ほかは、前述の理由により、乳牛去勢の減少が続いていることから、2年は、26万7900頭（同3.6%減）と前年をやや下回った。

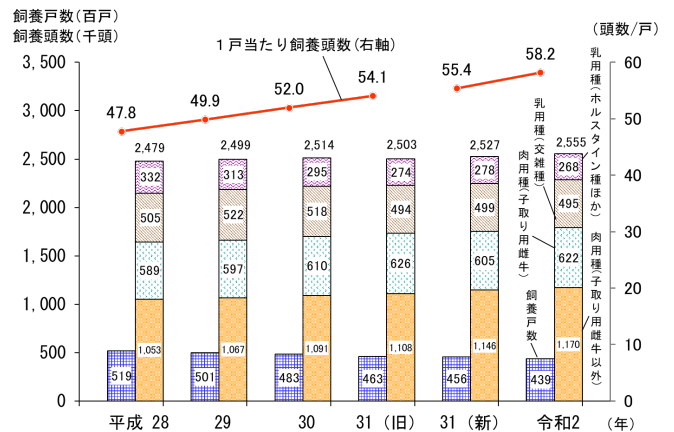
この結果、1戸当たりの飼養頭数は、58.2頭（同

5.1%増）と前年からやや増加し、経営規模の拡大が進展していることがうかがえる。

（注1）前年比（増減率）は、平成31年（新）と令和2年の数値を機構にて比較し、算出した。

（注2）肉用牛の「乳用種」とは、「畜産統計」では、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種のうち、肉用を目的に飼養している牛で、交雑種を含むと定義されている。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
 注1：各年2月1日現在。
 注2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。
 注3：平成31年（新）のホルスタイン種ほかの飼養頭数は、機構にて当該年の乳用種飼養頭数から交雑種飼養頭数を減じて算出した。

◆ 生産

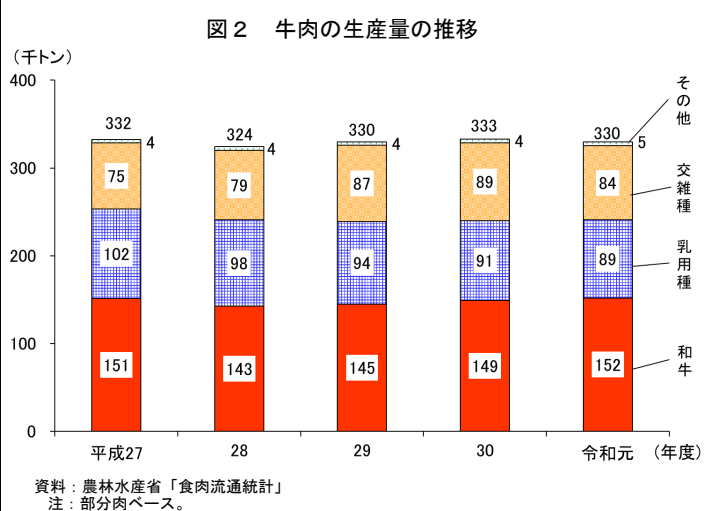
元年度の生産量、前年度比 1.0% 減

飼養戸数の減少や平成22年の口蹄疫の発生、23年の大規模生産者の経営破たんなどにより繁殖基盤が縮小し、牛肉生産量は減少傾向で推移していた。29年度以降は生産基盤強化対策の実施により繁殖基盤が拡大に転じたことなどにより、和牛を中心におおむね増加傾

向で推移している。

令和2年度は、乳用種は8万9003トン（前年度比2.1%減）とわずかに、交雑種は8万4179トン（同5.1%減）とやや、いずれも前年度を下回った一方で、和牛は15万1965トン（同1.9%増）と前年度を

わずかに上回った。この結果、全体では32万9654トン（同1.0%減）と前年度をわずかに下回り、3年ぶりの減少となった（図2）。



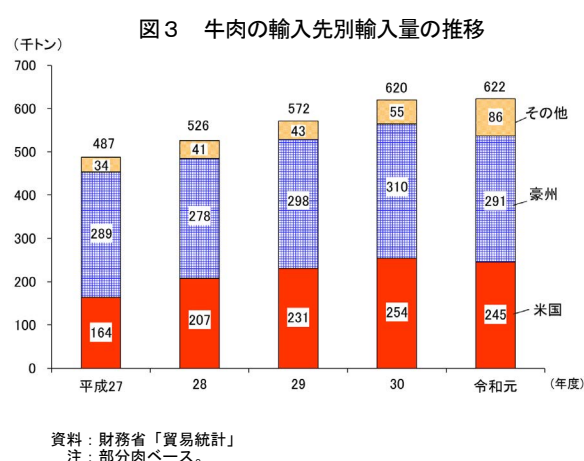
◆ 輸入

元年度の輸入量、4年連続で増加

牛肉輸入量は、近年、国内の好景気などを背景に、焼き肉やハンバーガーなどの外食産業を中心に牛肉の需要が拡大していたことから、おおむね増加傾向で推移し、平成28年度から30年度にかけての平均増加率は約8%と高水準で推移していた。

令和元年度は、62万2332トン（前年度比0.4%増）と前年度をわずかに上回り、4年連続の増加となったものの、直近3カ年度の平均増加率と比べると鈍化が見られた（図3）。

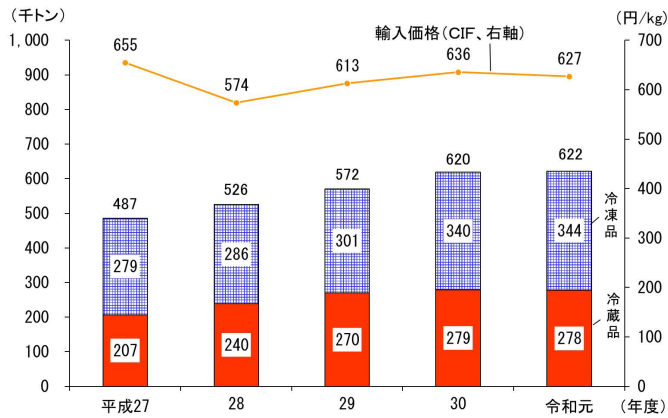
国別輸入量を見ると、豪州産については、中国におけるアフリカ豚熱発生の影響で、中国が豪州産の輸入を増やしたことによる競合などにより、29万926トン（同6.2%減）と前年度をかなりの程度下回り、3年ぶりの減少となった。米国産については、日米貿易協定が発効するまでの間、先に発効したTPP11と関税率の差があったことなどにより、24万5343トン（同3.5%減）と前年度をやや下回り、4年ぶりの減少となった。



輸入牛肉のうち、冷蔵品は主にテーブルミートとして量販店で販売されており、冷凍品は加工用や業務用として利用されている。近年、いずれも増加基調で推移しており、2年は、冷蔵品は27万8119トン（同0.2%減）と前年度並みとなった一方で、冷凍品は34万3590トン（同0.9%増）と前年度をわずかに上回り、4年連続の増加となった（図4）。

輸入価格（CIF）を見ると、1キログラム当たり627円（同1.4%安）と前年度をわずかに下回り、3年ぶりの低下となった。

図4 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格の推移



資料：財務省「貿易統計」
注1：冷凍品にはくず肉などを含む。
注2：部分肉ベース。

◆ 輸出

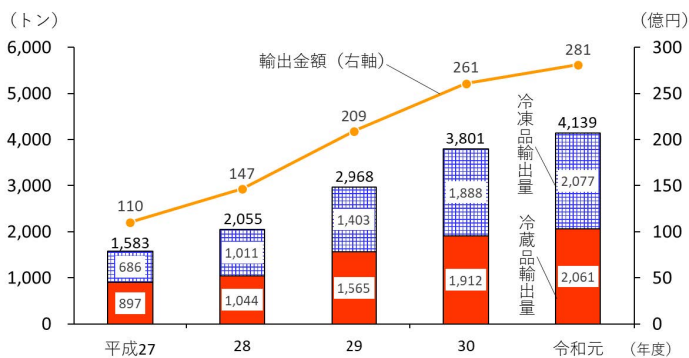
元年度の輸出量、6年連続で増加

牛肉輸出量は、日本産和牛の認知度の向上などにより、6年連続で増加している。

令和元年度は、4139トン（前年度比8.9%増）、輸出金額は281億円（同7.8%増）と過去最高となった（図5）。

輸出量の内訳を見ると、冷蔵品は2061トン（前年度比7.8%増）、冷凍品は2077トン（同10.0%増）となり、冷蔵品と冷凍品の割合は同程度となっている。

図5 牛肉の輸出量および輸出金額の推移



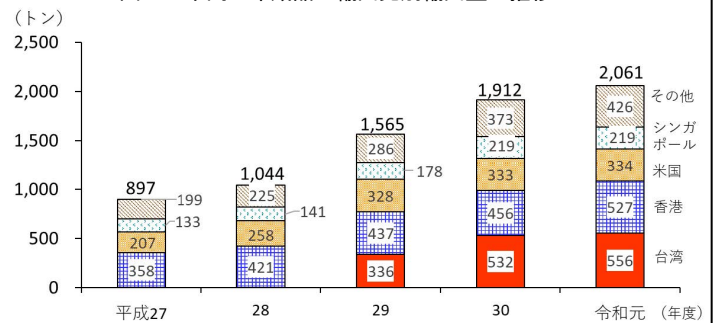
資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

輸出先については、牛肉全体で見ると多くがアジアに輸出されているが、冷蔵品と冷凍品で輸出先は異なっている。日本からの牛肉の輸出が可能な国・地域は、アジアを中心に中東、欧州、北米・中南米、大洋州のさまざまな国や地域に広がっている。

冷蔵品の輸出先を見ると、元年度の最大の輸出先は台湾で556トン（シェア27%）、次いで香港が527トン（同26%）、米国が334トン（同16%）、シンガポールが219トン（同11%）となり、上位4カ国・地域で約8割を占めている（図6）。

台湾向けは、日本で牛海綿状脳症（BSE）感染牛が確認されて以来停止されていた日本産牛肉の輸入が16年ぶりに解禁された平成29年度以降、輸出量を伸ばし、現在は冷蔵品の最大の輸出先となっている。

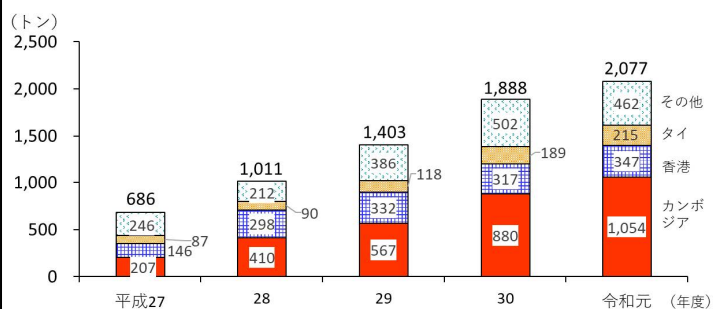
図6 牛肉の冷蔵品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

冷凍品の輸出先を見ると、元年度の最大の輸出先はカンボジアで1054トン（シェア51%）、次いで香港が347トン（同17%）、タイが215トン（同10%）となり、上位3カ国・地域で約8割を占めている（図7）。

図7 牛肉の冷凍品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース。

◆消費

元年度の推定出回り量は前年度比0.7%増、家計消費は同2.5%減

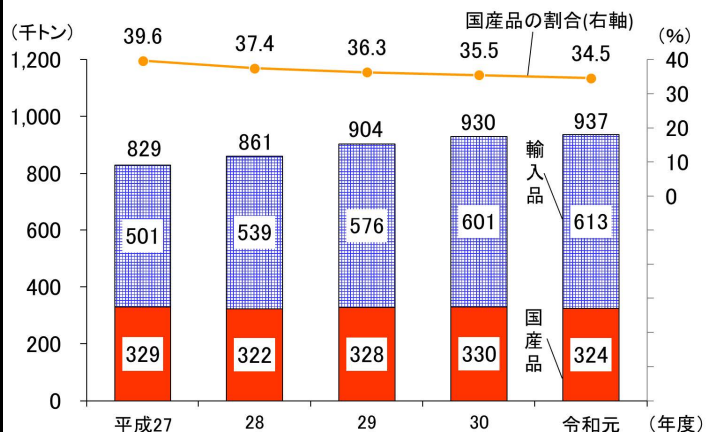
推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、近年の肉ブームなどを背景に好調に推移してきた。

令和元年度は、国産品については、枝肉の相場高を背景に小売価格も比較的高い水準で推移する中、消費増税などによる消費者の節約志向などが反映され、32万3534トン（前年度比1.9%減）と前年度をわずかに下回った。輸入品については、焼き肉やハンバーガーといった外食需要やハンバーグなどの調理済食品への需要が好調に推移したことから、61万3410トン（同2.1%増）と前年度をやや上回った。この結果、全体では93万6945トン（同0.7%増）と前年度をわずかに上回り、4年連続で増加した（図8）。

なお、合計に占める国産品の割合は34.5%（同1.0ポイント減）と5年連続で前年度を下回った。

図8 牛肉の推定出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構推計

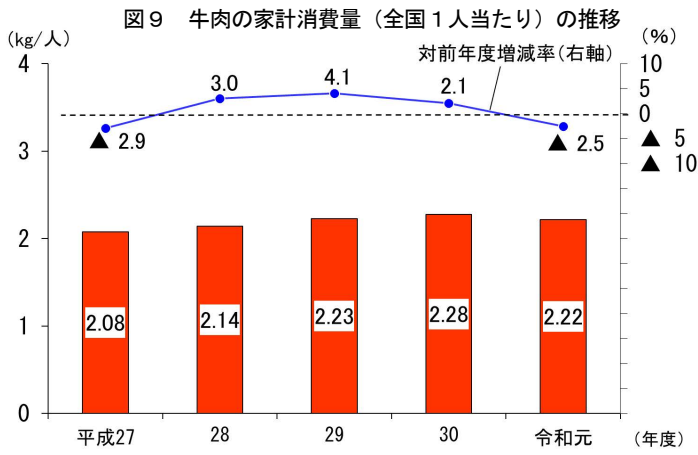
注：部分肉ベース。

家計消費

牛肉消費の約3割を占める家計消費は、近年の景気回復や好調な牛肉需要を背景に回復傾向で推移してきた。

令和元年度は年間1人当たり2.2キログラム（前年度比2.5%減）と、前年度をわずかに下回り、4年ぶりの減少となった（図9）。

この理由として、需要期に悪天候の影響により行楽需要が振るわなかったこと、消費増税による消費者の節約志向などが反映されたものとみられる。



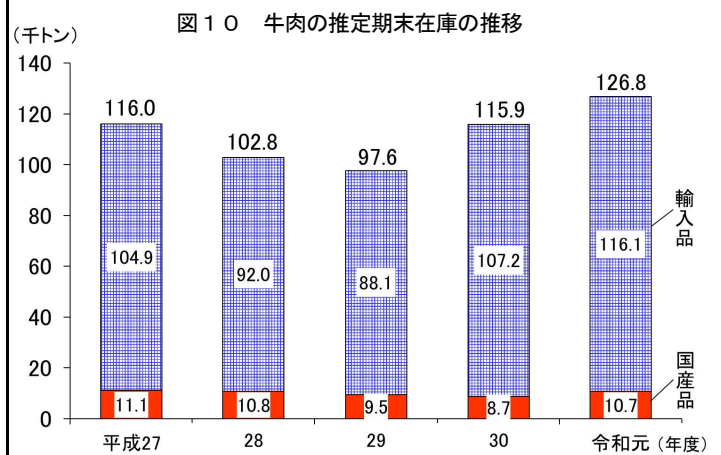
資料：総務省「家計調査報告」

◆ 在庫

元年度の推定期末在庫、前年度比9.4%増

牛肉の推定期末在庫は、平成29年度までの輸入量が増加傾向で推移していたものの、輸入品の出回りが好調であったことなどから、在庫の取り崩しが進んだ。しかしながら、30年度は需要を上回る輸入が続いたことから5年ぶりに前年度を上回った。

令和元年度は、新型コロナウイルスの影響による外食需要などの減少により、全体では12万6843トン（前年度比9.4%増）と前年度をかなりの程度上回った。このうち、輸入品は11万6128トン（同8.3%増）とかなりの程度、国産品は1万715トン（同22.7%増）と大幅に、いずれも前年度を上回った（図10）。



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。
注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

◆ 枝肉卸売価格

元年度の牛枝肉卸売価格、和牛はおおむね前年同月を下回って推移

和牛

和牛（東京・去勢A—5、A—3）の枝肉卸売価格は、平成23年以降、出荷頭数の減少により価格が上昇基調で推移した。28年以降、和牛の出荷頭数は3年連続で増加したものの、インバウンド需要や輸出需要を含む牛肉需要の高まりなどから、記録的な高値を維持したまま推移してきた。

令和元年度は、4月以降、5等級を中心におおむね前

年同月を下回って推移し、例年、価格が上昇する12月に価格の低下がみられた。この結果、A—5が1キログラム当たり2666円（前年度比5.4%安）とやや、A—3が同2086円（同7.7%安）とかなりの程度、いずれも前年度を下回った（図11）。

交雑種

交雑種（東京・去勢B—3）の枝肉卸売価格は、近年、和牛の相場高を背景に、比較的手頃な価格帯で適度に脂

肪交雑が入っている交雑種への引き合いが高まったことなどにより堅調に推移している。

令和元年度は、引き続き同様の傾向が続いていることに加え、出荷頭数の減少から、1キログラム当たり1590円（前年度比0.9%高）と前年度をわずかに上回った。

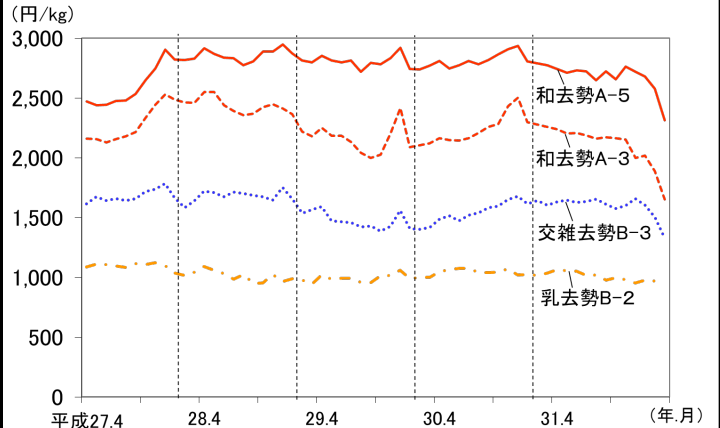
乳用種

乳用種（東京・去勢B-2）の枝肉卸売価格は、国産牛の中でも比較的安価で赤身が多い牛肉への底堅い需要がある一方で、出荷頭数が減少傾向となっていることから堅調に推移している。

令和元年度は、出荷頭数の減少が続いていたものの、

1キログラム当たり1002円（前年度比4.2%安）と前年度をやや下回った。

図11 牛肉の卸売価格（東京・品種・規格別）の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：消費税を含む。

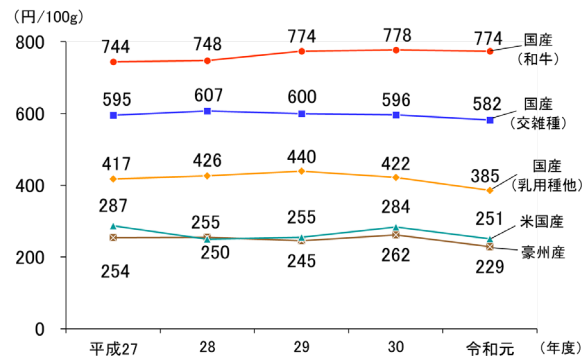
◆小売価格

元年度の小売価格、和牛のばらは1キログラム当たり774円

牛肉の小売価格は、品種や部位によって動きは異なるものの、おおむね横ばいで推移している。なお、国産品については、近年の枝肉の相場高を背景に、比較的高値が続いている。

元年度の小売価格（ばら）は、和牛は1キログラム当たり774円（前年度比0.5%安）、国産牛（交雑種）は同582円（同2.3%安）、国産牛（乳用種他）は同385円（同8.8%安）、米国産は同251円（同11.6%安）、豪州産は同229円（同12.6%安）と、いずれも前年を下回った（図12）。

図12 牛肉の小売価格（ばら）の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。

◆肉用子牛

元年度の肉用子牛価格、黒毛和種は前年度比2.6%安

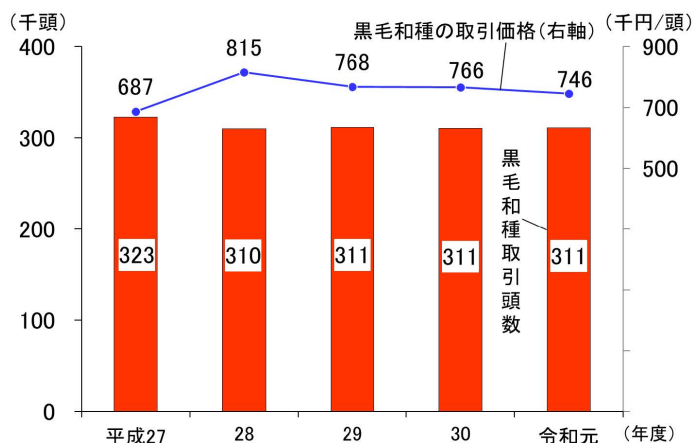
黒毛和種

家畜市場における黒毛和種の子牛取引頭数は、減少傾向にあった繁殖雌牛が生産基盤強化対策などにより平成28年度に増加に転じたことから子牛の取引頭数は回復傾向で推移し、近年は安定して推移している。令和元年度は、31万1286頭（前年度比0.2%増）と前年度並みとなった。

また、子牛取引価格は、繁殖基盤の縮小に伴う出生頭数の減少や枝肉の相場高などにより平成22年度以降に上昇が続いた後、28年度をピークに低下しているものの、引き続き高い水準で推移していた。

元年度は、1頭当たり74万6000円（同2.6%安）と前年度をわずかに下回った（図13）。

図13 黒毛和種の取引頭数と市場取引価格の推移



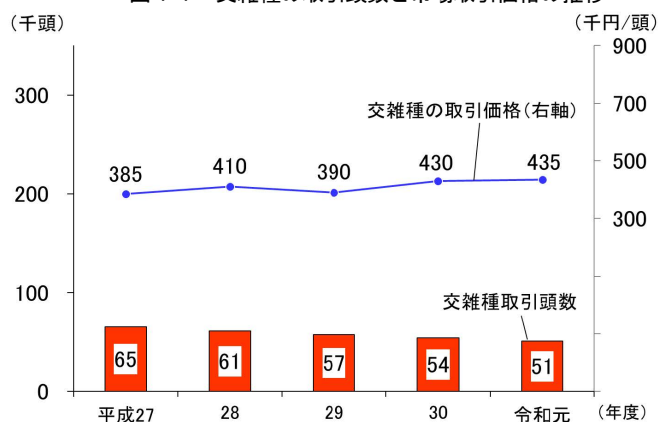
資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。

交雑種

家畜市場における交雑種の子牛取引頭数は、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や乳用後継牛を確保する動きから、平成28年後以降、前年度を下回って推移している。令和元年度は、5万683頭（前年度比6.7%減）と前年度をかなりの程度下回り、4年連続の減少となった（図14）。

また、交雑種の子牛取引価格は、近年の枝肉の相場高や出荷頭数の減少を背景に、25年度以降、29年度を除いて前年度を上回って推移している。元年度も同様の傾向が続き、同43万5000円（前年度比1.2%高）と前年度をわずかに上回り、堅調に推移した。

図14 交雑種の取引頭数と市場取引価格の推移



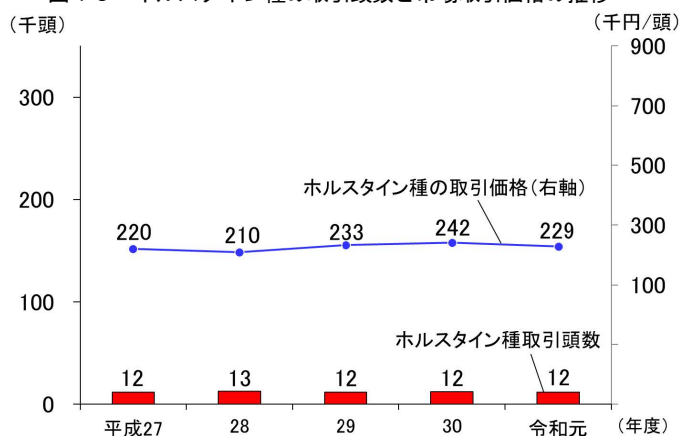
資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。

ホルスタイン種

家畜市場におけるホルスタイン種の子牛取引頭数は、近年、おおむね1万2000頭台で推移している。令和元年度は、乳用牛への受精卵移植技術の活用による和子牛の生産拡大などにより、1万1683頭（同2.1%減）と前年度をわずかに下回った（図15）。

また、ホルスタイン種の子牛取引価格は、近年、枝肉の相場高などを背景に、平成23年度以降、高水準で推移している。元年度は、同22万9000円（前年度比5.4%安）と前年度をやや下回り、3年ぶりの低下となった。

図15 ホルスタイン種の取引頭数と市場取引価格の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。